

お目かけられて下さりませと云ふ恐れ入た口上ぢや、さア貰ふて見るとどうぢや。何にも知らぬ不東者と仰有つたが中々どうして、お茶、花から遊藝の道一通りは申すに及ばず、女として恥しう無い丈けの読み書き算用までチャンと仕込んだる。成程汝見たいな極道には下さるのを嫌やがつて二の足を履みなさつた筈ぢやと思ふた哩。殊にその心根の優しい事といふたら、婆どんと早う別れて、男手一つで汝を育てた親ぢやと思ふてか、何につけてもお父つあん〜と大事にしてくれる。わしやいつも佛壇の前へ坐つて、貴女は早う死んで可哀想ぢや。俺しや長生をしたお蔭でこんな孝行な嫁を持って、今日もこれ〜してくれだ。こんな事も云ふて呉れたと、毎日婆どんに云ふて聴かしてゐる哩。あの當座は汝もどうぢや。夜が明ける。お花。日が暮れたらお花。やれ〜これでどうやら納まつて呉れたと喜んだのも束の間ぢや。ものゝ一月と経つか経たぬかにモウ元の通りの極道三昧。三日四日と家を明け腐る。お花を貰ふてから未だコレ三月餘りぢや無いかい。それにまあ何たる状ぢや。移り氣ぢやと云ふたが無理か。」

「いや恐れ入りました。成程ホンにそう云はれますと移り氣かも知れまへん。まア親に似ぬ子は鬼子や云ひまつさかいナ。蛙の子は蛙だすワ。」

「コリヤ聴き捨てならん。何で俺しが極道ぢや、若い時から今日迄お茶屋の梯子は昇つた事が無いのぢや。常には双子より柔い物は氣持が悪うてよう着ませんワ。それに何を以て極道ぢやと云ひなさ

る。」

「いや決して極道やとは申しまへん。まあ、そう急かんとお聴きやす。いや宜しい。お父つあんが移り氣な證據を申し上げまひよう。大體あんたは信心家過ぎる。やれ今日は何處夫處の御御帳や。いや今日は何々のお講やと毎日々々お出掛けなはる。子といふ者は因果な者で、あゝ、あないして毎日出掛けて行きやはるが、年寄りの身で怪我でも無けりや良えがなアと、歸つてお來なはるまで安心出來まへんがナ。内にもあゝしてお佛壇が有るのや依て、宅で拜んで置きなはつても同なし事やおまへんかと云ふたら、いや〜矢つ張り立派なお堂で拜むのと阿彌陀はんの有難さが違ふと云ひなはる。そんなら何處ぞにお氣に入つたお佛壇でも有つたら、お買ひなはつたらどうだすと云ふた處が、實は立花通りにとても立派な大きなお佛壇がある、それが欲しいて堪らんと云ふてだした。アゝそんな事位で危いお寺詣りが止むのんならと、早速其佛壇を見に往た處が生地と云ひ塗りと云ひ、彫りの具合から箔の色迄寸分申し分おまへんワ。直ぐ様人を頼んで買ひに往て貰ふたら先さんお眼が高い。聞けばお宅の親旦那さんは豪い御信心家で、彼地の御堂、此地の御厨子と拜み盡してお居なはる。左様なお方を買ふて頂きましたも、直ぐ様アラが生まれてお飽きが出て參るに違ひムりません。折角乍ら何卒お考へ直しの程をと、まあ體の良え斷りだしたなア。あの時の貴方はんの悲觀方何うでおました。良え齡して見つともない涙をポロ〜溢しなはる。見るに見兼ねてもう一